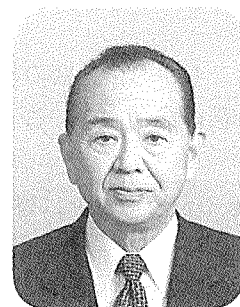


半世紀を迎えたPC業界

織 戸 鐵太郎*



新年明けましておめでとうございます。

21世紀がスタートして1年が経過した。この間の最大の出来事と言えば、アメリカ同時多発テロの発生、その後の米国のタリバン制裁措置、さらには米国政府中枢を襲った生物化学兵器炭疽菌テロ、そして最近では西欧文明とイスラム文明の全面的な対立に発展する気配さえ予感され、まさに波乱の世紀の幕開けとなった。この影響は世界の政治、経済に及び、わが国の株価も1万円を割り、失業率もかつてないほどの高い水準になり、わが国の経済は今や舵を失った船のようである。

ところで、今年はPCがわが国に導入され、第1号橋が完成してからちょうど50年目になる。その頃建設された橋梁は、当時の設計荷重の2倍近い荷重に耐えて今も健在である。

半世紀にわたるPCの歴史を振り返ってみると、当初の短スパンのI型、T型単純桁にはじまって、押出し工法、片持ち張出し工法などの施工面での技術開発による長スパン化、さらに斜張橋やエクストラードロード橋、また最近では鋼・コンクリート複合構造橋などの構造面での更なる技術開発の実現など、PCは大きな成長を果たしてきた。

これは、PCの合理性を追求したたゆまぬ技術開発もさることながら、発注者がPCに大きなご理解をいただいた賜である。業量も飛躍的に伸びて、1995年度から2000年度まで6年続けて5000億円の大台を維持している。2001年度も、第二東名神高速道路、整備新幹線等の大型プロジェクトの発注もあって、今までのところ順調に推移している。厳しい情勢ではあるが、何とか5000億円には届くのではないかとと思われる。

問題は2002年度以降である。来年度の公共事業費の10%削減、道路特定財源の一般財源化など、受注全体の86%を橋梁上部工が占めるPC業界にとって、

このままでは死活問題である。この傾向は来年度だけでなく、将来にわたって、都市再生という追い風はあるものの、橋梁工事の減少は避けられないであろう。したがってわれわれは、橋梁以外の分野にも活路を求めなければならないが、現在、最も期待の大きな分野は、われわれが半世紀にわたって築いてきた膨大な社会資本を守る仕事、すなわちリニューアル市場である。現在はこの道路関連部分は3000億円程度であるが、今後は社会資本の維持、保全のために予算が増加するものと思われる。

また、将来の少子化、高齢化に伴う労働人口不足に対応して、プレキャスト化が経済的にも適応する時代が来るであろう。とくに建築分野では、PC技術を生かした高層化、プレキャスト化が、PC技術者の努力次第では今後大いに発展するものと思われる。

このような努力を積み重ねても、わが国の建設投資が縮小する中で、PC業界の業量も縮小することを避けることはできない。

われわれは、企業のスリム化、コストダウンなど、すべて原点に立った変革を図っていかなければならない。

また、業界としても、今の入札制度のもとでは同業間の合併はメリットがないと思うが、技術開発、設計、工場などの部門ごとの提携は検討すべき課題である。

さらには、示方書の性能照査型への移行や経済性重視の動きが材料の適材適所指向をさらに押し進め、複合構造の一般化がいちだんと進むと予想されることより異業種の業界間の協調が強く求められるであろう。

おわりになったが、今年はfib第1回コンGRESSが日本で開催される。PC建設業協会としても、後援団体として、この世界大会が成功するよう、精一杯のお手伝いをさせていただくつもりである。

* Tetsutaro ORITO: (株)プレストレスト・コンクリート建設業協会 副会長, オリエンタル建設(株) 取締役会長